

令和3年度(2021年度)

第1回熊本県社会教育委員会議の開催結果について

県社会教育課

1 日 時 令和3年(2021年)7月28日(水) 10:00~12:00

2 場 所 県庁行政棟新館7階 教育委員会室

3 出席者

- ・熊本県社会教育委員 12人(欠席2人)
- ・熊本県教育庁 古田市町村教育局長
- ・県社会教育課 須恵課長 他8人

4 協議事項

- (1) 熊本県社会教育委員会議のテーマ「子供・若者の地域・社会への主体的な参画において社会教育が果たす役割」について
- (2) 社会教育関係団体補助金の交付について ※非公開

5 主な意見等

【事務局から】

- ・本テーマに係るこれまでの経緯、本日の協議内容、今後の流れについて説明する。
- ・本テーマは、令和3年2月に開催した令和2年度第2回本会議において承諾いただいた。
- ・テーマイメージ図(別紙参照)については、部会において提案があり図の中心に子供・若者を据え、社会教育と学校教育が連携・協働して子供・若者の地域・社会への主体的な参画に向けた機会づくりを表現した。
- ・本テーマの承認から4か月ほどが経った。この間の各委員の実践や周囲の取組事例等を紹介いただくとともに、推進する上での課題点を出していただきたい。
- ・令和4年2月開催予定の第2回本会議において、本日、第1回本会議で出された意見や今後の取組状況をまとめ、報告する。

【各委員から】

- ・小、中学生の夏休みを利用して、今年初めて、老人クラブ連合会・地域婦人会・子ども会の三者合同による「ラジオ体操をしよう会」を各校区に分かれて開催した。参加者同士の対話が生まれ、世代間交流のよい機会となった。

- ・子供の人数が減少するという事はネガティブに見えるが、何かに取り組むことで機会が増えるということもある。また、助成などの支援があればさらに活性化する。
- ・中学生がSDGsの学習を行っている。生徒が地域に出かけ、地域の課題を探し、取り組んでいる。子供たちの活動から、地域公民館の活動としても、今後、研修内容にSDGsを取り入れたいと思う。また、企業等と連携した取組もできるだろうと思う。子供たちを巻き込み、子供たちに教えてもらってでも取り組むことはよい。
- ・子供の活動と地域活動に相乗効果が期待できる。
- ・以前は、社会教育関係団体が子供と一緒に活動していたが、減少している。子供たちは地域教育の中で活動することにより、地域のすばらしさに気づき、心にゆとりを持てるようになる。そのためには、社会教育関係団体の動きが必要である。
- ・個人の価値観の転換ということも含めて子供を主体にすることを考える必要がある。また、伝統ある社会教育関係団体をいかに再活性化するか。
- ・登下校の挨拶運動や交通指導など、子供の見守り活動を行っている。読み聞かせなど、他にもサポートする体制はあるが、コロナ禍で学校に行くことが難しく、ほとんど活動できていない。
- ・コロナ禍で活動が制約される。普段の活動がいかに貴重だったのかが分かる。逆に、アフターコロナで何を構想するかが問われている。
- ・よりよい社会を作っていく資質・能力を身につけた子供・若者の育成という目標はよいが、その資質・能力というのが、大人のほうにあるのか悩むところである。
- ・ある小学校の校舎の階段が解体されるというニュースがあった。学校が定期的に校舎を開放すると、卒業生や地域の方々が訪れ、懐かしんでいる。しかし、過去の出来事から、子供の安全を守るため、学校を開放することに苦慮しているところもある。
- ・子供の頃の経験がグローバルな活動につながることもある。
- ・地域・地方でやれることにこだわることの方が、結果的にグローバルな広がり強みになる。
- ・学校は地域の拠点といわれる。学校の教職員もその認識を持つ必要がある。
- ・テーマイメージ図では、学校教育と社会教育が握手をしている。お互いがお互いをリスペクトし合い、同じ方向を向いて継続して取組むことが子供たちにとって大事である。
- ・学校運営協議会に児童会が参加し、児童会の取組として挨拶運動を行った。地域の方々が児童に声をかけてくださる。
- ・今、学校では、世代交代が大きい。社会人になる前に地域の良さを味わったり、地域活動に参加したりすることなどの経験が大事だと思う。
- ・学校運営協議会に参加すると、そこに生徒会がいなかったのが、入れていただいた。
- ・子供の参画の機会や、子供の主体性を育むには、ステージを用意する必要がある。さらに大事なことは、子供が所属感を感じられることである。
- ・学校は教育機関であると同時に、子供たちの安全を守る場所だということを先生方にも分かってほしい。学校に来ていることが尊いことなのだとすることを共有できるとよい。
- ・こども食堂を運営している。こども食堂は、子供たちが食事をする所と思われるが、子供たちが食

事を作ることも必要だと思う。活動するステージを用意すると、子供・若者も活躍できる。

- ・機会をつくることで、対話が生まれ、多様な価値観に触れることができる。
- ・私達大人が、子供・若者の思いに触れ、気づくこと、そして子供たちを多面的に見て、理解しようとする気持ちを伝えていかないと、子供・若者に届かない。
- ・企業や事業所の協力をいただいて、生徒が実習に取り組んでいる。実習を通して生徒の成長を感じるとともに、事業所等の方々に学校を知っていただく機会にもなっている。
- ・校内に地域交流の場としてカフェスペースを設けている。地域の方々にも利用していただきたい。
- ・児童委員の中に主任児童委員がいる。子供たちが持ついろいろな課題を解決するために活用いただきたい。
- ・活動が停滞したり、形式化したりと、実は機能しなくなっている制度もある。
- ・教育と福祉、児童等をつなぐためのルートがある。意外なルートからのつながりが、大きな力となることがある。
- ・コロナ禍の影響もあるだろうが、子供が小学校に入学した途端、学校での子供の様子が見えなくなった。PTA役員の活動もできていない。幼稚園の時には、コロナ禍でも会議などを行い、保護者同志の横のつながりがあった。
- ・子供・若者が主体的に参画できるようになるには、学校教育における機会づくりと社会教育における機会づくりを連携して取り組んでいくことが大事である。
- ・朝の見守り活動をしてくださる老人会の方々がいる。子供を持つ親として地域の方々の力は、本当にありがたい。
- ・ものすごい支援がほしいわけではなく、声を聞いてほしい、ちょっと知らせしてほしいということが、保護者の助けになる。
- ・子供・若者それぞれへのアプローチの方法がある。
- ・子供（学校に通っている子供）については、学校と地域の連携をどう強化していくかということが大切になる。教育委員会の役割を生かせるところである。
- ・若者（大学生からそれ以上）については、生まれたところを離れて進学する学生も多い。入学とともに、それまでの地域との関わりが切り離されてしまう。そして、大学を卒業して仕事に就くと、いきなり地域と関わる仕事となる。若者を地域と主体的に関わらせる仕組みづくりが必要である。
- ・若者と地域の双方にとって関わり方が分からないというのが、最大の課題だと思う。県には若者と地域がつながっている事例やノウハウを蓄積し、広めてほしい。
- ・学校を取り巻く状況の厳しさの中で、先生方の意識についても変化が必要ではないかと思う。

【座長のまとめ】

- ①大人自身も変わるべき（大人自身が自分の中に壁をつくっている、思い込み）
- ②伝える・聞く（分かっているだろう、分かってくれるだろうと甘えない）
- ③コロナ禍（しなければならぬこと、いつ止めてもよいこと、新たに取り組むこと）